

第4回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

平成29年12月26日（火）14:00～16:15

2 場所

大津合同庁舎7-B会議室

3 出席者

三日月知事、青木教育長、藤田委員、河上委員、佐藤委員、土井委員、岡崎委員

大津市立真野北小学校 校長 山元 千恵子 氏

滋賀ダイハツ販売株式会社 取締役 平尾 香子 氏

【事務局】西川健康医療福祉部理事、河瀬教育次長、岩谷教育次長、猪田管理監、山田教育総務課長、辻本教職員課長、板倉健康福利室長、樫原高校教育課長、青木高校再編室長、西嶋幼小中教育課長、奥村生徒指導・いじめ対策支援室長、首藤人権教育課長、森特別支援教育課長、湯木保健体育課長、大西生涯学習課長、久保田私学・大学振興課長

4 子どもたちが滋賀を知り、滋賀を愛し、滋賀を豊かにする力を育むために ～「滋賀ならではの」を生かした教育活動の推進～

青木教育長

それでは時間もまいりましたので第4回滋賀県総合教育会議を開催いたします。ご存じのとおり今年度は子どもたちの個性、その多様さについて議論をしております。具体的には、学校間、学年間、教科間の学びの接続をどのようにして取り組んでいくのかという事。そして、インクルーシブ教育システムの構築という大きくはこの2題で議論をしてまいりました。今日はテーマとして2つおしこんでまいまして、時間的にも短いなかではありますが、前半は子どもたちが滋賀を知り、滋賀を愛し、滋賀を豊かにする力を育むためにということで、「滋賀ならではの」を生かした教育活動の推進。また後半は、社会全体で子どもたちを育てる滋賀の教育を目指してというこの2つのテーマで意見交換をしたいと思います。まず前半のテーマとして、大津市立真野北小学校、校長の山元千恵子様にお越しいただいております。そして、後半のゲストとして、滋賀ダイハツ販売株式会社取締役の平尾香子様にもお越しいただいております。お二人にはこの後、情報提供をいただきたいと思います。それでは、開会にあたりまして、知事から挨拶をお願いします。

三日月知事

みなさま、年末も差し迫った中お集まりいただきましてありがとうございます。今年一年もさまざまなお立場で大変お忙しいところ、日々御協力いただき感謝申し上げます。

昨日ですが、子ども県議会がございまして、学力の高い滋賀というテーマで質問・発言があり、教育長と答弁をいたしました。

ポイントは2つありまして、学校ならではの授業を大切にしてほしいということと、地域で勉強会をやってほしいということでした。ポスターを作ったということもご紹介いただき、とてもいい取組だと思いました。今回のテーマにも繋がりますが、そういった形で地域の中で子どもたちを育てるということを今後も推進していきたいと考えております。

私の方でいろいろと調べておりましたところ、総務省の生活行動・生活習慣に関する調査の結果があり、滋賀県はボランティア活動をし

ていますかという質問のところで、33.9%で全国1位となっております。これは報道等で知っていたのですが、まちづくりのための活動や、子どもを対象とした活動については、平成18年が6.9%だったのが平成28年度昨年度の調査では10.8%で大きく伸び、10位になっておりました。

今後ともこのような形で地域のお力もお借りしながら、取組を充実させていきたいと考えております。簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

青木教育長

ありがとうございます。恒例ではございますが、私の後ろにございますこちらの横断幕について、本日は八日市高等学校の書道部が書いてくださいました。先日の議会でも質問があり、滋賀県では型にはまらない書道を行っていくということで、また生徒さんの力もお借りしながら取組を進めさせていただきたいと思っております。

それでは、早速前半に入りたいと思います。はじめに事務局から説明をお願いします。

土 淵 参 事

それでは、A3サイズの資料1「平成29年度第4回滋賀県総合教育会議（前半）」をご覧ください。

第1回総合教育会議にご提案いたしました本年度の年間のテーマ案の中では、「滋賀の地域性を生かした学びの創出」という視点のもとに、子どもたちそれぞれの滋賀への興味や関心を育む必要があるという位置づけで意見交換を行う予定としておりました。

そのような当初の考え方を踏まえながら、資料1の1. 会議の基本的な考え方を基に今回のテーマについて御説明させていただきたいと思っております。

資料上段、会議の基本的な考え方の部分をご覧ください。まず会議を始めるに当たって、滋賀県においては自然や地域と共生する力を育むために、本県が有する豊かな自然や、琵琶湖と密接した暮らし、有形・無形の文化財などを生かした様々な地域学習が行なわれております。

ただ、二つ目のポツに記載をしてございますが、一方で社会が多様化する中、教育に多くのことが求められるようになり、今申し上げた

ような滋賀ならではの地域資源を生かした十分な地域学習の確保が難しくなっているといった状況もございます。

三つ目のポツをご覧ください。地域学習による体験が、子どもたちが体験するだけでなく、体験からその先につながり、滋賀や地域の課題について主体的に考えることができるよう内容の充実が今後重要となってきました。

最後のポツは滋賀県としての現状でございますが、少子高齢化による担い手不足や、人々のつながりの希薄化により、地域資源の継承が難しくなっているという状況もございます。

これらのことから資料枠囲み部分に記載してございます通り、今後の課題といたしまして、地域学習による体験を通じて、子どもたちが滋賀県の地域資源に触れ、体験をすることで、そこにある課題は何なのか、またそこに対してどのように対応していくべきなのか等を考え、主体的に関わる力を育んでいく必要があると考えております。

地域学習の充実により、今回のタイトルにもありますように、子どもたちの自然や地域と共生する力を育み、地域に愛着や誇りを持ち、地域に貢献できる力を育んでいく必要があると考えております。

本日は、実際に地域資源を活用した学習活動を展開されている大津市真野北小学校での事例や、活動を続けられる中で子どもたちへの効果などをお聞きし、意見交換を行っていただければと考えております。

意見交換の参考としまして、滋賀県においてどのような地域学習や体験活動が行われているのかについて御紹介をいたします。資料2をご覧ください。

会議の考え方の部分でも申し上げましたが、滋賀県においては滋賀の自然や地域と共生する力を育むこととしております。そのために、県として力をいれている事業についていくつかこちらの資料に記載をしてございます。

まず特徴的な取組としまして、滋賀県内のすべての小学5年生が体験する学習船「うみのこ」によるフローティングスクールがございます。琵琶湖と密接したまさに滋賀県ならではの取組であります。

また、地域資源を活用した学習活動としましては、郷土の歴史や文化財を活用した文化財保存修理の工事見学会や専門家による出前講座

なども行われております。

さらに、滋賀県にある地域資源は様々であることから、今ほど紹介いたしました大きな県をあげた事業としてのみではなく、学校がそれぞれ独自で行なっている地域学習も多様なものになります。そちらを資料には記載しておりませんが、いくつかご紹介させていただきます。

伝統芸能を生かした地域学習としましては、甲賀市立水口小学校での水口囃子、長浜市立びわ北小学校では、富田(とんだ)人形という地元で伝わる人形浄瑠璃を子どもたちが地域の方から学び、発表会を行う取組があります。

地域の歴史を活用した学習としましては、長浜の小谷城跡(おだにじょうせき)で長浜市立小谷小学校の子どもたちが一般の訪れた方々に観光ボランティアを行う取組がございます。

地元の企業様との協力では、野洲市立北野小学校では、学校の側に立地するオムロンさんや京セラさんの工場内にあるビオトープを活用した地域と密着した環境学習が展開されており、また、中学校2年生が参加する中学生チャレンジウィークについては、大津市立石山中学校において、地元の企業様の御協力もあり、1年生から3年生全学年が企業体験を行うといった取組がございます。

このように、滋賀県のいろんな、豊かな人、ものの資源を活用した滋賀ならではの教育が行なわれており、我々としても大変心強く思っております。

先ほど会議の考え方の部分でも申し上げました通り、このような滋賀ならではの地域資源を生かした学習を子どもたちが体験するのみで終わらず、滋賀県をよくしたい、滋賀県に貢献したいという子どもたちの想いに繋げていくような取組が重要となっており、今回のテーマを設けさせていただきました。

説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

青木教育長

ありがとうございました。それでは現場の取組としまして、真野北小学校 山元 千恵子 校長先生より情報提供をいただきたいと思います。山元先生よろしくお願いいたします。

山元校長

真野北小学校、校長の山元と申します。よろしくお願いいたします。学

校は昨日から冬休みに入っており、今日の午前中も子どもたちが寺子屋教室で宿題を持って地域の方が宿題を教えるということをしてまいりました。

真野という地域では、現在子どもたちが少なくなっている状況にありますので、本当に地域が子供たちを大切にしようということで進んでいる地域です。今年度、地域の特性を生かして学び合いの中で、コミュニティ・スクールを始めました。コミュニティ・スクールの一番の目的としましては、真野北を心から好きといえる子供を育てるということで始めさせていただきました。その中で、学習コミュニティ、心のコミュニティ、地域コミュニティという三つのコミュニティを学校職員、地域の方、保護者を含めて組織いたしました。その中の地域コミュニティ行動計画の中にあります、「真野北について知ることによって故郷である真野北を好きになる地域学習」ということで取組を続けております。そちらを本日は少しご紹介させていただきたいと思います。真野北は1970年代にはじまった新興の住宅地であり、滋賀京都大阪から寄せ集まった人たちが多くいる地域です。また曼陀羅山古墳群、名前は仏教用語ですが、その一部を学校内に持ち、4、5世紀の渡来人の歴史を持つ古い歴史を持った地域でもあります。その二つを学ぶことで地域を知り、地域を好きになるということで、6年生の総合的な学習として行っているものになります。一つ目ですが、資料枠の中で、円墳の発見と保存に向けた取り組みということで、これが当時の写真になります。真野北小学校の校舎の横に円墳が発見されました。5つあったそうです。本来であれば住宅地として整備されるという形で全部が撤去される予定でしたが、ちょうど6年生が歴史で古墳の勉強をしていく中で、越大津市長に残してほしいということを申し出、開発会社の方もわかっただいて、第5号墳がすべて学校の敷地内に残っています。ですので、子どもたちは毎日古墳を見ながら生活をしているという状況です。

資料のほうをめくっていただいて、地図が載っておりますが、学校の敷地がだいたい真ん中になります。曼陀羅山古墳群を含む山があり、これもローズタウンという新しい街にあります。ローズタウンは小野学区と真野北学区の二つに分かれております。地図上で見ていただくと、真野小学校、小野小学校の直線距離はすごく短く見えるのですが、

実は直線でつながっているわけではなく、この曼陀羅山があるからです。この曼陀羅山に古墳群があるので、一つの街とせず山を残されたということが地域学習の中で子どもたちが学ぶ内容にもなっております。

ちょうど古墳めぐりという形で、3時間目・4時間目の1時間強で歩くコースを学習として取り組んでおります。講師は、社会の専門家でもあります。私の4代前の校長が専門家として、市のセンターでも職員をしておりますし、毎年講師をお願いして勉強をさせていただいています。曼陀羅山は大きな山ではありませんが校区を一望に見渡せる山でございます。

「真野北古墳を愛する会」というのが地域にございます。ほとんど自治連合会のかたが入っておられ、古墳を愛する会で草が生えてくるのを掃除してくださっていたのですが、地域と学校がばらばらにやるのではなく、一緒になって取り組むことで、ここがどういう場所だったのかという歴史等も話しながら、同じように草をひき、古墳を大切にするというという取組をしております。

開発の歴史もございますので、コミュニティ・スクールの会長でもある方に真野北学区のなりたちについても講和をしていただいております。昔山だったところを写真で見せてもらって、子どもたちに説明してもらったりしております。学校があったところ、家があったところは山だった、田んぼ、丘だったという地域が、山が崩されたりする中で後々今の地域になったという説明を聞きます。この地域自体が、本当に新しい地域なのですが、故郷を子どもたちに作ってあげたいという想いがあります。普通の地域ですと地蔵盆等があったりしますが、おみこしもお地蔵さんもないので、地域の子供たちのふるさとのために夏祭りを盛大に行ったり、餅つき大会もされています。夏休み、冬休みには寺子屋教室でお勉強会をしていただいております。今年、コミュニティ・スクールを始めるに当たり、放課後学習を取り入れ、その講師にも地域の方がきていただいております。

次のページには子どもたちの授業の感想が書いておりますので、のちほどお読みください。いくつかポイントを申し上げますと、3ポツのところになりますが、「僕の学校の中には古墳があります。残っているのはこの古墳だけです。今高校一年生の人が残してくれました。」

とあります。みんなの先輩が残してくれたんだという歴史がこうやって伝わっております。

それと真野北学区の誕生に関する話をしたところで、1ポツ目で、「真野北の街ができるまでは、山と丘と田んぼしかないところでした。道がまっすぐなのは、住宅をたくさん増設するためでした。山が残ったのは古墳があるからでした。古墳がここにあってなくななくてよかった」ということが書かれています。一番最後では、「真野北は新しい街だけれども夏祭りや綱引き大会など、楽しい行事がいっぱいあり、みんなが楽しい思いができるように大人の人たちが作ってくれたことがわかった。今年の夏祭りは、去年の6年生の人達がみんな来ていた。僕も行くだろうなと思う。そこでまたみんなと会えるのが楽しみ。」こんなふうに地域と共に進んでいるところでおります。

最後のページです。今お話しした内容で分かっていたかと思いますが、資産があっても伝承していかなければただの場所になってしまいます。そこを生きた場所にするには。常に勉強をしつづけることが大切だと思います。私もここに赴任して2年目です。このことを知る教員はどんどん異動してしまっているの、少なくなってしまうております。いまの小学校1～2年はまだ教えていないので、あれがどういう場所なのか知らないの、6年生になってしっかり歴史として勉強をする、草をひきながら教える。そういったなかで、当時のことを知らなくても、風化しないように教育課程にしっかり盛り込んでいく、教員がどれだけ変わっても変わらないものを確立することが大切ではないかと思ひます。

今年度コミュニティ・スクールになり、学校に来られる地域の方もどんどん増えて言っております。なかなか学校が地域に出来ることはそうはないのですが、子どもたちとやることで元気になれるという地域の言葉もあります。この取組を続けていく中で、地域を愛し、地域をたいせつにするなかで、また故郷に帰ってきてくれたらいいなと考えております。説明は以上になります。

青木教育長

それでは、事務局の説明と山元先生からもいただいたお話を踏まえまして意見交換をお願いしたいと思います。後半のテーマでもあります、子どもたちの社会全体で育てるところにも繋がっていくも

のかと考えますが。今回は前半のテーマに集中して意見交換をしたいと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

藤田委員

地域でこそできるよい取組をいただいているように感じました。どういうルーツでこの地域ができあがっているのかという知識は大変重要であると思います。自分の地域の魅力を知ると、他の地域と比べられるような力もつきます。お話を聞いていると、潰すのにはもったいない地域資源だなと思いました。こういう価値のあるものを地域が持っていたのだと知るの、教育としてとても良い機会であると思います。地域のルーツを知れば知るほど、違う地域の魅力もわかりますし、理解できます。また、僕たちの滋賀はこういうところだと言える力もつけられるのではないのでしょうか。

三日月知事

取組をお聞きして、この活動は大変良い取り組みだと感じました。滋賀県内に、古墳はいくつくらいあるのでしょうか。滋賀県は早くから渡来人が来ていることもあり、資料を見てますとこの地域だけで111個あるということですよね。探せばもっとあるのではないのでしょうか。ちなみに、県内に学校の敷地内に古墳があるというのは、真野北小学校の他にはあるのでしょうか。

青木教育長

甲良養護学校もそうだったはずですが。

佐藤委員

逆に真野北小学校のみなさんに滋賀県下の小学校を回ってもらって、僕たちはこんなことしているけど、他の地域のみんなも自分の地域を調べてみたらどうかということも言えるのではないのでしょうか。そうすると、教育委員会の我々も知らないことが、さらにわかってきたりするように思います。すごく財産になるものですしね。

藤田委員

地域でこういったことを議論できるということはいいことです。

佐藤委員

私も観光産業のものですが、必ず新入社員には地域を探訪させて、自分たちの地図を作らせるようにしております。真野北小学校の取組

と同じような形で、地域を知るからこそ、お客様からのご要望であるとか、いろんな好奇心がわいてくるのだと思います。小学校の頃からこういう形で学習をしていただいているのは、地域に根付いた社会人・職業人になれるようなよいきっかけだと思います。地域の宝ですよ。

岡崎委員 地元が好きになるからこそ、自分の地域に住んで、大事にしようと思えるんですよ。

藤田委員 滋賀県にはいろんなブランドがありますが、そこに歴史等の強みがあればさらにブランド化しやすいと感じます。先ほども申し上げましたが、地域に子どもたちのルーツを作るという教育は非常に大切だと思います。

岡崎委員 今のお話を聞いていて、新しい住宅地でこういった風土を積み上げられるという学習はよいと思います。ただ、先ほどの事務局の資料でも説明がありましたが、地域学習がしにくくなっているのは何故なのだろうと感じました。新しい地域でこういった学習をしていただいて、しっかり子供たちにその内容が伝わっていているように思いますが、地域学習をうまくやっていくような工夫を何かされているのでしょうか。

山元校長 もともと最初にこの地域に入ってこられた方々は、そういった地域を引き継ぐ志を持った方が多かったという恵まれた状況にあったということはあると思います。それこそ、隣が何をしているか知らないという事になりえる土地だったと思うのです。

藤田委員 地域の魅力とは人の魅力と同じだと思っています。この人の魅力をどういうふう引き出せばよいかということを企業としての教育でやるのと同じで、学校教育でも地域の魅力を起こすことによってさらに子どもたち自身に地域のその魅力が刷り込まれていくような印象を受けます。

三日月知事 この地域学習は、平成 26 年に古墳が発見されてから始まったのでしょうか。

山元校長 曼陀羅山古墳群というのはずっと存在しておりましたので、古墳があったということはわかっていました。ですので、学習活動としては、ずっと続いております。学校敷地横の森を発掘調査しましたところ、この古墳が出てきまして、本当であればこれを全て潰して住宅になる予定でした。実際 1 号墳があったところは住宅になっております。地形的に学校の中に入り込んでいたのが 5 号墳でありましたので、ここを大津市の方が学校の敷地として入れてくださったということです。

三日月知事 滋賀なら探せば地域の歴史的なものがいろいろとあるのではないのでしょうか。古墳に限らずとも、何かがあるように思うのですが。

岡崎委員 昔も総合的な学習のような時間でいろんな町をまわって、そこのお寺を回って説明を聞いたりする機会があったように思います。

河上委員 まず、子どもたちの身近なところからやるということが次につながっていくのだと思います。昨日の子ども県議会のニュースを見ても中学生の生徒さんが、まず自分の身近なところからいろんな疑問を感じ、関心のあることを見つけることが大事だということでインタビューに答えてらっしゃるのを聞きました。なにか大きな参加型のイベントをしたとしてもそれが一回だけでは、なかなか子どもたちにつながっていくのは難しいのです。子どもたちが気づいたところから、いろんなことを継続していくということで、子どもたちの学びも深いものになっていくのではないかと思います。先ほど知事が言われたように、滋賀県はボランティアの参加率も高いですし、子ども食堂の設置率も高いと聞いております。そういったボランティア精神の高い方々に応援してもらいながら、子どもの気づきとつながっていくような取組を進めていくことが重要ではないかと思います。

土井委員 山元先生、本日はありがとうございます。古墳を通じた取り組み、すごくよいものだと思います。そのうえで、一点申し上げたいのは、

この地域学習を地域で閉ざさないように、開かれたものにするにはどうすればよいかということを考える必要があります。それには2つの次元があり、1つは学習としてどうかということと、もう1つは地域の在り方としてどうかということです。学習活動として、地域の自然や歴史を事実として知るということは、非常に大切なことだと思います。真野北小学校でされている学習活動も最初のステップとして非常に大切なことです。ただ、これをそれで終わらせないためにどうすればよいかということを考えないといけないと思います。例を挙げますと、自然学者にダーウィンがいますが、彼はガラパゴス島で珍しい種類の動物を発見したわけです。それらを観察したときに、これはガラパゴスならではの動植物であるから、これを大切にしようと考えられることもとても大事です。しかし、ダーウィンのすごいのは、それだけではなく、そこから進化という普遍的な考え方にたどり着いたところなんです。この点が学習活動の中で大切な部分だと思います。もう一つ地域の在り方として大事なものは、知事もおっしゃいましたが、この古墳があった時代は、真野が世界とつながっていた時代です。渡来人たちが来て、最先端の文化や技術があった時代なわけです。地域を地域として大切にすることも重要なことですが、それをどう他の地域とつなげ、世界へ発信していくのかも大切です。地域を開かれた形に作っていきませんか、地域が持続可能でなくなってしまう。このような学習を通じて、地域を学ぶことも大切ですが、それと同時に、地域を通じて何かを学んでいくという点も大切なことであると思います。

藤田委員

いま土井委員がおっしゃったように、己を深く知って他人を知れるものなのだと思います。自分を知らないと、相対的に他のところとの違いがわからない。こんな違いがあるということで、お互いが理解できる部分があります。

三日月知事

古墳の学びから、このときは日本の国土が大陸とつながっていたという学習はあるのでしょうか。渡来人とは何かということであつたりのにさらに広い学びはあるのでしょうか。

山元校長

そこの学びを社会科でやります。

三日月知事

土井先生、藤田先生が言われたように、うちにはこんないいところがありますということを学ぶだけではなく、「滋賀ならではの」を活かした教育活動をしながらか、他地域とのつながりとか、普遍的な価値観とか原理の発見などにつなげていけるような学びや学習活動が大切なのだと思います。

土井委員

滋賀の魅力は滋賀の人だけが知っていればよいというわけではないのです。その魅力が本当の魅力であるなら、誰にでもわかってもらえる普遍的な何かがあります。そこにつながっていくということが、より深いところにつながっていくということになるのでしょう。

藤田委員

滋賀県には、これは地域の何なのだろうと考える資源はたくさんあるんです。自分たちが大人になったときに、地域にはこういうものがあつたんだ思えるような効果が出るのが大切であると思います。

岡崎委員

小学校においてこういう形で地域のことを知るということは、さきほどの知識を得るということと同様なのでやはり継続していく必要があると思います。

三日月知事

私はこの真野北地区の近くで小学校生活を過ごしました。でも、近くに古墳もあつたが、このような学びはなかったように思います。しかも新興住宅地でしたので、私の小学校のあるところとよく似ていますが、地域の独自のものがなかったように思うので、このような展開は大切だと思います。

佐藤委員

大陸との繋がりがあつたとか、そういった学習を中学の学びにつなげていくようなことはあるのでしょうか。

山元校長

古墳の学習自体を中学校でやるわけではありません。ただ、真野中学校と3月に地域をまわって掃除をするという取組がありまして、小学生の子たちが中学校に安心していけるように取り組んでおります。

そのときに、学校を通って古墳群を回っていきます。夏祭りも小学校で行われますので、そこにきた中学生は小学校にある古墳を見ることがもできます。

三日月知事 小学校では新聞を作ったりしながら一生懸命学ぶのですが、学習内容では中学校との繋がりがありますか。

幼小中教育課長 それはあります。学び方が変わるが、内容としてはしっかり繋がっております。

岡崎委員 もっと言いますと、こういった地域の事を伝える後継者がほしいなと思いますね。

山元校長 ここでいいますと、曼陀羅山古墳群と、春日山古墳群というのがあります。春日山古墳群と形が違うので、渡来人の間でも違いがあるのだろうということも考えられます。掘り下げようと思えばいくらでも掘り下げられる要素があるので、ここで興味を持った子たちが高校、大学と進むなかで、また勉強をしていってくれたらいいなと思います。

岡崎委員 中学校になったら古墳を作ってみるみたいな体験をしてみてもいいかもしれませんね。この時代にはこういう石の積み方をして、こういう技術があるという学びもいいのではないのでしょうか。

青木教育長 先生方の中で、子どもたちに地域学習を通じて、こういうことを教えていこうとか、どういう形で教えていこうとか、そういう話をされたりすることはありますか。

山元校長 これを続けていくためには、全教職員が関わる必要があると考えております。教員のメンバーが変わるので、それぞれの教員がしっかり学校のある地域の勉強をすることも大切だと思います。

三日月知事 真野北小学校としては、この地域学習を続けていくうえでの課題は何かありますか。真野北小学校としては、やりたいことはしっかりや

れていると感じられますか。

山 元 校 長

時間的にも制約はありますが、この時間だけは絶対確保したいと考えています。本年度からコミュニティ・スクールになって、地域の方がたくさん学校に関わってくれるようになったので、地域との関係がより強くなったと思います。

三日月知事

コミュニティ・スクールになると何が変わるのでしょうか。

山 元 校 長

学校がやろうとしていることや、やったことを地域の方に承認をしていただく必要があるというところが大きな違いです。そのこともあって、地域の方が学校運営に参加しないといけないと思ってくれるところが全く違うように感じます。地域の掃除をするということ一つをとっても、地域の方で考えてくれていたりします。今までは、学校から頼みにいくという形でしたが。

青木教育長

新しいところに古墳があったというところ。私は田舎だが、地域のよいものをどう掘り起こしていくのかという事が大切で、そこがコミュニティ・スクールが大切である。

河 上 委 員

私の地域では、学区での運動会等の行事に中学生が出来るだけ参加できるよう、クラブ活動をすべて中止にしたりします。自治会の手伝いをする子もいますし、テントで皆さんとおにぎりを食べたりする子もいるわけですが、そういうことが秋の祭りにつながっていったりすることがあります。夏休みも、自分で課題を考えて、地域で何か役に立つことをしておいでということで、小学校の子たちのラジオ体操をサポートにいきましたとか、地域の草刈に参加しましたとか、そういう形で子どもたちが地域に出て地域を見て、実はこういうお祭りを担っていく人がいないんだということを知ったうえで、まずはそこを知るという事が大切ではないかと考えております。それがどのように祭りの継承等につながっていくのかというところにまではつながっていないんだと思いますが、まずは知るということが大切だと思います。

三日月知事

若い年代の人たちは、祭りがあったとしても、参加することに消極的になってしまうこともあると思います。そこを何とかひっぱりだせるような地域力が必要なのではないでしょうか。他の地域を見たときに得られる視点や示唆が入ると、滋賀ならではのモノや地域ならではのコトに光が当たってくるように感じます。そのためにも、教員・学校が感性を磨くことや、そうしたモノ・コトに気づく教員のゆとりが必要なのではないかとも思います。他府県との教員の人事交流なんかすると、そういう気づきが生まれるのかもしれないですね。

佐藤委員

企業でもよくされていることですからね。

土井委員

滋賀の琵琶湖を見ていいなあと思えるのは、やはり出張などで東京から帰ってきたときだったりします。外を知るという事は地域を知ろうえで、大切なのではないかと思います。

藤田委員

昔はお祭りに今よりも楽しみがあったように感じます。今後何を子どもと大人の間にある共通のプラットフォームとしていくのかというところが非常に大切であると思います。ここは、学校でなく、地域でやっていくべきなのでしょう。

三日月知事

他の学校の校長先生方とお話をされる中で、うちの地域は何も地域学習の要素がないという話があったりはするのでしょうか。滋賀県は何かしら探せばあるとは思いますが。

山元校長

何もなくてもできますし、真野北も古墳だけでつながっているわけではなく、昼休みに地域の方々が来てくれて子どもたちと遊んでくれたりします。地域のおじいさんたちと将棋の対戦を挑んだりして、次いつ来てくれるのかと楽しみにしている子もいます。昔からずっとある遊びを子どもたちが一生懸命やる姿をみてこういうのは本当に大切だなと感じます。

青木教育長

まだまだ、ご議論いただきたいところですが時間が参りました。この議論のスタートは、まず子どもたちが地元を好きになるにはどうすればよいかという所でした。その中でここは、地域を通して学ぶ、他とつながる学習という、もう一段先の部分も見据えてやっていく必要があると思います。また一方で地域の素材というものを見つけにくいところをどうしていくかということを、楽しみながらやっていく必要があると思います。いただいたご意見も踏まえながら今後検討を重ねてまいりたいと思います。本日は山元先生ありがとうございました。引き続き後半に移りたいと思います。

5 社会全体で子どもたちを育てる滋賀の教育を目指して

青木教育長

それでは事務局から説明をお願いします。

土淵参事

それでは、A3サイズの資料4「平成29年度第4回滋賀県総合教育会議（後半）」をご覧ください。

後半のテーマはただいま教育長より御説明のありましたとおり、「社会全体で子どもたちを育てる滋賀の教育を目指して」とさせていただいております。

資料4の基本的な考え方の部分をご覧ください。

滋賀県において策定をしております「学ぶ力向上滋賀プラン」において目指す、子どもたちに夢と生きる力を育むことについて、本年度7月に開催いたしました第2回滋賀県総合教育会議では、学校で取り組むべき課題として「学年間の学びの接続・教科間連携および校種間の接続」を議論をいたしました。

会議では、保幼小の接続・小中の接続・中高の接続といった学校園間の接続についての課題と、各教科の指導内容を横断的にとらえる教育課程編成上の課題について、改善に向けての方向性が示されたところでございます。

しかし、今年度の学力調査結果からは、学校の取組のみでは改善しきれない課題として、家庭での過ごし方（家庭での学習、生活習慣等）に改善が必要なことが明らかになりました。

今年度滋賀県において取り組んでおります働き方改革推進会議においても、学校が取り組むべき課題をさらに改善するためには、教員が子どもたち一人ひとりと向き合う時間の確保が必要であるという意見も出ております。

そういったなかで我々といましては枠囲いの部分でございますが、子どもたちの放課後や家での時間の使い方という視点で、学習や生活習慣の定着といった課題が残っているということ。さらに、学校現場で取り組む課題がある中で、一方、学校の取組だけではなく、家庭や地域を含めた社会全体で解決していく課題もあると認識しております。

こういった現状や課題を受けまして、まず、幼小中教育課より家庭

での取組の重要性について御説明をさせていただきます。

幼少中教育課長

失礼します。資料 2-2、今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の結果をご覧ください。まず一番上ですけれども、家庭学習と平均正答率の相関について、本県の中学校三年生で見たものでございます。これについては当たり前といえば当たり前だが、学習の時間が多いほど正答率が高い傾向にあるということがわかります。それからその次、家庭での時間をどうつかっているのかというところで、テレビを見る時間、ゲームをする時間などのルールを家の人と決めていますかという質問において、全国に比べると中学三年、小学校六年生ともにルールを決めている率が低いという状況にあります。とりわけ、小学校から中学校へを見たときにその差がわかりやすくなっております。それから次、携帯電話やスマートフォンの使い方について、家の人と約束したことを守っていますかというところで、家の人と約束していますかというところで、守られているかという状況についても全国に比べまして本県の児童生徒の守っているという率が低いという状況がございます。それから、一番下ですけれども、学校の授業時間以外にどれくらい勉強していますかということについてですけれども、こちらにつきましても、全国値よりは低いという状況にあります。中学三年生では、家庭の学習時間ということについて課題があります。めくっていただきまして、放課後になにをして過ごしていますかということで、複数回答ですが、小学校か家でテレビをみたりゲームをしたりインターネットを見たりしているということが一位ということになります。ちなみにこれは全国よりも 5.4 パーセント高いものです。中学校は、一番は部活動に参加しているとうことになります。しかし、先ほどの小学校と一緒に、テレビやゲームが二番目に来ているということになります。6.7 ポイント、全国より高いということになります。このように全国学習状況調査から、本県の児童生徒の時間の使い方ということについて改善をして行く必要があると考えております。これは学力の向上というところだけではなく、将来にわたって自ら計画を立てて学んでいくということ、それから自分を律することというところを身につけるために重要になるのではないかと考えております。

土 淵 参 事

次に先ほども申し上げました、今年度取り組んでまいりました働き方改革推進会議においても本テーマに関して、様々な御意見をいただいております。そちらについてを教職員課よりご説明させていただきます。

教職員課長

資料の 2-3 をご覧ください。本年度四回に渡りまして開催致しました働き方改革推進会議の中でも、学校家庭地域の役割について議論をいただきました。こちらは主な意見について抜粋したものでございます。教員負担を軽減するという切り口からは、小学校に入学するまでに家庭生活を送る上で必要なことを身につけられるようにすることが先生の負担を取り除くためには必要ではないかというご意見。しつけ、習慣は生まれてから成長の中で身につけていくもので、周りに色々なことがきちんとできる子がいると影響を受けてできるようになっていたりする。そういった良い影響を受け合う環境をつくるのが学校の役割であると思うが、もともとの素地は家庭で作っていくべきであるといったご意見もある中で、学校、家庭の役割をはっきり分けることは意味がない。例えば挨拶であれば地域でも行うし、学校でも行うことであると考えするという意見もありました。また、メンバーの中の滋賀大学教職院大学の先生からは、家庭教育の啓発について、行政としての取組があっても良いと考える。教員の働き方を広く見据えながら、県として全体の意識づけをすることは意義がある。ただ、家庭と学校は単純に役割分担をすればよいということではないということを踏まえる必要がある。また、個々の実践によってなりたつ家庭教育の領域なので、一律的に取組の効果を想定してはいけない。といったご意見をいただいたところでございます。

土 淵 参 事

以上で事務局の説明を終わります。

青木教育長

ただいま事務局の方で説明をさせていただきましたが、働き方改革推進会議では本日お越しいただいております平尾様にもご参加いただきました。そういったことを踏まえてですが、企業のお立場、または保護者としてのお立場から、社会全体で子どもたちを育てる必要性についてご示唆をいただければと思います。平尾様、よろしくお願いします。

平 尾 氏

ありがとうございます。滋賀ダイハツの平尾でございます。本日は企業の目線プラス保護者の立場からお話をさせていただきたいと思います。働き方改革推進会議の内容も入っているというところで、意見が重なることもあるかと思いますがそこはご了承ください。私の中では、企業・上司・親として気をつけている、心がけていることについて3つお話をさせていただきたいと思います。

まず、1つ目が働き方改革推進会議でも出ておりました「当たり前のこと」ができていない大人・子供が多いと思います。子供は「三つ子の魂百まで」という言葉があります。3歳までにある程度の習慣や体の組織が決まると言われております。私も働いていて、きっちり挨拶をするスタッフもいれば、黙ってスーッと事務所に入っていくスタッフもいます。一から十まで言わないとやらないということが、育ってきた環境で違うのだと感じております。子供達と過ごしている時に感じるのは、「恥ずかしい」、「かっこ悪い」と人から言われたり、周りの人も挨拶をしないからそれでいいと思い、挨拶ができなくなっているように思います。学校など集団生活の中で後押しをしてくれるのが、先生方のお役目かなと思います。子供は、家庭では親の背中を見て、学校では先生の背中を見て育ちます。教育委員会様の学校支援メニューに登録させてもらっており、1ヶ月に2から3校トイレ掃除に行かせていただいております。車で学校に入ると、生徒さんから「おはようございます」という学校様もあれば、出会ってもこちらが先に挨拶をする学校様、生徒さんが「今日はありがとう」と言って下さる学校様もあります。先生方が挨拶や声掛けをされることで、生徒さん達も挨拶をされるということもあります。大人や先生、地域の方がお手本にならないといけないと思います。横断歩道で学校の立ち当番をした時に、「おかえり」と言ったら、「ただいま」と返す子供もいれば、黙って行ってしまう子供もいました。「『お帰り』って言われたら『ただいま』って言うんやで」と声掛けをしていました。地域の人でもそれを言えるのかどうかだと思います。これが、「社会全体で子供を育てる」ということではないかと思います。してはいけないこと、やらないといけないことを大人が言わないと、子供たちはそれが普通だと思ってしまいます。誰か言う人がいないといけないと思います。

挨拶をする・お礼を言う・ルールを守る・悪いことをしたら素直に謝るなど、基本的な事を大人・子供社会全体で、取り組んでいくのがよいのではと思います。当たり前のことを継続するということが重要ではないかと思います。

2つ目が、「褒める」と「叱る」です。これは大人社会でもよくあると思うのですが、感情で「怒ってしまう」人がいます。きちんと理由を持って、相手のことを思って「叱る」人もいます。ガンガン怒ると子供、社会なら部下や後輩は萎縮します。失敗はつきもので、次に繰り返さないように、話してあげるのがいいかと思います。やはり言い方一つで変わります。大人が「褒める」と「叱る」をしっかりと区別しないといけないと思います。最近、何も言わないと「優しい人・先輩」だと言う人が増えています。「優しい先輩」ってどんな人か聞くと、「何も言わない人」だという答えが返ってきます。それは違うという話をします。相手のことを思っていたら叱ることもあるわけで、「何も言わない人」が優しいわけではないという話は、よく話しております。「褒める」と「叱る」を理解していく必要があると思います。

最後3つ目は、一緒に時間を過ごしたり、一緒に学んでいく姿が今は欠けていると思います。トイレ掃除の時も、感じるのですが、先生も一緒にされる学校様、子供たちのみが掃除する学校様、さまざまです。子供たちがやることと、同じことを先生方もやって学んで、一緒に感じてほしいなと思います。先生方、大人が子供と一緒に時間を過ごしてもらえたら、社会全体で育てるということにつながるのかなと思います。先ほどのアンケートにもありましたが、「友達と遊ぶ」という項目も、集まってゲームをして遊んでいるという内容も多いのではないかと思います。人と人の繋がりということが、少ないように思います。集団生活や集団行動が大事だということを、社会全体で何かの取組みに繋がれたらいいなと思います。以上です。

青木教育長

それでは事務局の説明と、平尾様からいただいたお話を含め、社会全体でどのようにして子ども達を見ていくのかということについて、意見交換をいただければと思います。よろしく願いいたします。

三日月知事

県庁では挨拶ができているのか、褒めると叱るがしっかりとできてい

るのかな。大丈夫かなという思いで聞いておりました。

平 尾 氏 やはり人間ですし、感情がでることはあります。ただ、感情で言ってしまうと、次、何か失敗した時に、大人・上司・先輩に言えず、もっと大きい問題になってしまったり、思い詰めて、自殺するということになりかねないので、やはり寛大な心を持って、話しやすい雰囲気を作らないといけないと思います。

河 上 委 員 平尾さんに質問させていただきたいのですが、平尾さんのお子さんが小さい時には、いまのお仕事をされながら、保育園にお子さんを預けつつ仕事を続けられていたのですか。

平 尾 氏 私は両親に見てもらいながら、仕事を続けています。実家の両親がほぼ親代わりです。私が子どもを出産した時は、産休・育休を取ることが少ない世の中でしたので、私の勤務先も取得する人がいなかった状況です。産後は1ヶ月少しで復帰をいたしました。

河 上 委 員 いま社会の動きでも、女性活躍推進法ですとか、待機児童解消とかそちらの方に動いていて、小さなお子さんをそだてる保護者のみなさんにもそういう情報が入っていると思うんです。一方で、平尾さんがご両親に頼っておられるように、近所の人や年配の方に三つ子の魂百までと言いながらそんなことを教えてもらったり、関わり合いながら幼稚園に入るまで家庭で一緒に過ごしたりする方もいます。いまは、どちらかというと前者の方の情報が多く多いので、小さい子どもさんをお持ちの方も、保育園に預けるのが普通だという感覚になっているように思います。うちの孫も保育園にお世話になっておりますが、長時間の保育をされていていたり、イベントをしていただいたり限られた人数でしていただいております。ありがとうございますと感じております。しかし、子どもの心の安定感という面から考えますと、自分を大切にしてもらうことで、他の人に大切にするというような自尊感情にもつながってきます。それが、ゆくゆくは何かを頑張ろうかなという時の踏ん張りにつながったりするのではないかと思います。保育園に行くとそこが育たないということではなく、一緒にいる時間の濃さが大切な

だと思います。そういうところが今の社会のうごきだけでいいのかなと感じますし、地域の我々のような立場の者が、家庭で育てるということが大事だよということを伝えていく役目もあるのかなと思います。

藤田委員

仕事と家庭と地域を両立していただいている話をいただいたのだと思いました。時間の使い方や内容を時代の流れと併せ持って考えていく必要があると思います。親が叱るということは愛情がその中にあり、先生が叱るのとはまた別の捉え方があると思っています。家庭と学校では居場所の質が違い、学校では集団教育での学びがあるわけです。今の時代を子どもたちがどのように生きているかということをまず考えることが大事だと思います。これから出てくる人たちはデジタルネイティブな人が多いわけなので、やはりアナログな部分、つまり感情の部分を高めていくことが今後は重要だと思います。

三日月知事

先ほどの事務局の説明でも、家庭での生活習慣などが学力テストにも影響があるのではないかというデータがありました。働き方改革の観点からの抜粋でも、小学校に入学するまでに、家庭で身に付けておくべきことがあるのではないかという意見がありました。平尾さんも、企業でも当たり前のことができていない部分があり、学校に行っても挨拶をしてくれなかったりするということを感じられているお話がありました。これは、みんながそれを感じ始めていて、今後学校に入ってくる子どもの学習習慣をどうすればつけられるのかということにつながると思うのですが、そこは何かお考えがありますか。

平尾氏

まずは、大人の考え方から変えていく必要があると思います。大人がしっかり子供達の躾をしていかないといけないと思います。大人の教育、大人の躾という部分が先になるのでしょうか。子どもだけ「勉強しなさい」、「これはしてはいけない」と言っても、子ども達はまっすぐなので、大人がしていないのに「なぜ子どもだけに言うの？」となります。大人と子どもが一緒に何かをすることで、子供達も納得するのだと思います。

三日月知事 ちなみに、そういう親教育といったところで県の事業ではありませんか。

岡崎委員 県の事業としてはないかもしれませんが、PTAとしてはやっています。

生涯学習課長 県としては、PTAの方を対象にした研修会というのは開催をしています。

三日月知事 そうするとPTAの力というのは大変重要なものということですね。

藤田委員 役員面接で、幼少の頃どう過ごしてきましたかということを知るところもあると聞いています。それくらい幼児期の過ごし方が大切だということでしょう。やはり子供が育った時には、親の影響を受けているはずですから。

佐藤委員 女性活躍が推進される中で、自分の親御さんにお子さんを預けるということに関して、自分の親のようにしたくないから保育園に預けるという方が時々おられるように思います。親御さんがお元気であれば預ければどうかと提案しても渋る方が結構な確率で、最近はあるように思います。保育園に預けた方が、箸の持ち方なんかも教えてくれるということをよく聞きます。家でやっても無理なので、幼稚園や保育園に行かすんだと。ですので、先ほど平尾さんもおっしゃったように、子どもたちが見る親の背中が何なのかというところが、我々の世代とは全く違うのではないのでしょうか。

土井委員 学校の授業は、楽しい授業にしないとはいけませんが、楽な授業にしていけないと思います。叱るという行為は、叱る方も叱られる方もしんどいのです。ただ、しんどいことから逃げているのは、大切なことはできません。叱る側がどう叱るのかという問題もありますが、叱られ方という問題もあるのです。叱られることが少なく、叱られ方が下手な人は、叱る側をさらに怒らせてしまいます。叱られることも学

習なのです。間違いをおかしたら、叱られてしっかり謝るということを身につけなければなりません。叱られるのが怖くて逃げることを覚えてしまうと、一番肝心なところで逃げてしまう、無責任で信頼されない人になってしまいます。誰しも叱られるのは嫌ですが、叱られることで責任をとる、あるいは、次に繋げることを身につけることが人間としては必要なのだと思います。ただ、叱るという互いにとってしんどいことをするときには、叱る側に愛情が必要です。ですから、子どもに対して本当にしんどいことをできるのは、子どもに対して本当に愛情を持つ親なんです。学校の先生ではありません。親が愛情を持って叱ることで、叱られている側も、そこに自分のことを思ってくれているのだという、叱ることの意味を受け取ることができるようになるわけです。そうした意味を親との関係でしっかり身につけた子が、学校に上がって先生に叱られたときに、先生が自分のことを嫌いと言っているわけではない、この叱られたことをどう次に活かすかを考えることができるようになるわけですし、そのことが社会に出てから大きな意義を持ちます。そういう意味では、親がしんどいから逃げてはいけません。しつけができないという親の悩みは、子どもに嫌われたくないなど、少し逃げている部分もあると思うのです。では、どうすればしっかりと叱ることができるのかといわれれば、確かに難しいところです。どうするかは難しいところですが、ここは取り組まないといけないところなんでしょうね。

岡崎委員

小学校に4月に入学してきた1年生の子がいますよね。座ってられない子がいたりする中で、12ヶ月後の3月の卒業式には、6年生がしっかりとした祝辞を述べたり、ちゃんと座って話を聞いています。その姿を見ると6年かけて子どもたちはここまで成長できると実感できるいい経験をしました。その姿を見て気づいたのですが、卒業式に出ている子どもの6年前を見てないのでわかりませんが、子どもは時間をかけてしっかり卒業式に出られるようになるまでの成長を遂げるということなんです。さっきの議論で、子どもの個性が芽生えると受け入れられないものは当然受け入れてくれなくなりますが、やはりそれ相応に幼稚園3年間、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、大学4年間とそれぞれの段階で子どもの成長があるので、変わるきっ

かけというのは先程から出ている「環境」なのではないかと思います。学習環境と一言で言い表すと手荒かもしれませんが、家庭で親が叱る時に親子の対話の時間が必要で、一緒にいる時間がなければ叱るにも叱れませんよね。帰ってきたら、ただいまと言ってからすぐに怒ってしまうのでは何の効果もないわけです。親がしっかりと会社で働き方改革を実現して、早く帰宅し我が子の成長を見てあげるといった時間がないとしつけられない。つまり家庭での教育もできないということになるのでしょう。

藤田委員

昔のような家庭の時間を取れなくなっているんだとは思いますが。職場と家庭も一緒になったりしていますし、お父さんたちも全く子どもと顔を合わす時間がないという中で、今の時間の使い方を働き方改革の中で本当に価値のある時間の使い方に変換をして行かなくてはならないと思います。何も残業をなくすことのみが、働き方改革ではありません。時間の価値というものをどう変化させていくべきかということが大事で、その1つが家庭での時間の使い方なのでしょう。ここは本当に難しいと思います。感情等の情と言われる部分は、特にデジタルでは測れません。これからはそこが大事な時代になってきます。だからといってこれだけ普及したデジタルなものを止める、代替するということはできませんしね。

三日月知事

いまこれだけある情報機器やデジタルなものを、はいアナログにしましょうというのは難しいですもんね。デジタルな時代にはデジタルを使ったコミュニケーションがあるのではないのでしょうか。例えば、そうした機器を使って、子どもたちとコミュニケーションをとるとか、その使い方を子どもたちに教えてもらうとか。今あるものでコミュニケーションを取るという前向きなメッセージなり、取組につながるといいなと思います。自分がやっていることが悪いと感じるのか、違う使い方があると思えるのかでここは全然変わってくるのかなと思います。

岡崎委員

昨日うちでも話題になっていたのは、高校生が郵便切手をいくら貼ったらいいいのかと疑問を持っても、毎日持って見ているスマホで調べ

てみようという好奇心に繋がっていないのです。ネットでお笑いとかを見るのには好奇心があるが、道具をうまく使いこなすスキルについてはまだまだ教えられてない。これを道具として使ってほしいと思って買い与えても、動画に夢中になったりするわけです。

藤田委員 日常の楽しみの中だとそのような発想は出ないかもしれないですね。

岡崎委員 関心あるものを見たり調べたりというのは確かなので、持つことやめさせるより、どう使ってもらうかを考えた方が世界は広がると思います。

三日月知事 そういった中でも、約束は守らないといけないということですよね。

藤田委員 これをやりすぎると睡眠時間もどんどん減っていきますしね。勉強をしていると言っても、部屋でどうしているのかは、なかなかわかりません。実際夜遅くまで、全然違うことをしているかもしれない。本当に必要であれば、強制的にシャットダウンもできるのですが、なかなかそれも難しいことだと思います。

岡崎委員 だからこそ、あるものを使いこなすということが大切です。使いながら、当たり前のことをできるように育てないと、子どもたちが社会に入るときに困りますよね。

藤田委員 そういう意味でも企業人教育というのも必要です。

三日月知事 企業としてできること、つまり学校に行って掃除を一緒にやるとか、そういう関わりを増やしていくべきなのでしょう。旅館でも中学生の職業体験を受け入れてくださっていますが、そういう機会が多いといいのではないのでしょうか。

佐藤委員 それこそ、すごく挨拶してくれる学校とそうでない学校は比率で言えばしてくれる学校の方が多いと思うんです。そっちのことをもっと

発信していけば、するべきだという空気になっていくのではないかと思います。

三日月知事

それもいいことだと思います。例えば平尾さんが行かれて、生徒のみなさんに「元気に挨拶できてえらいね、これってすごくいいことだと思うよ」と言ってくれとすると、親御さんや先生以外からも褒められたことで子どもも「自分たちが何気なくやっていることはいいことなんだ」と、後の人生にも生きてくる発見があるのではないのでしょうか。そういうポジティブな動きをしていくのがいいのではないかと思います。

岡崎委員

負のスパイラルという言葉がありますがプラスのスパイラルもあると思います。悪い事ばかり取り沙汰されますけど、いいことをもっと取り上げて発信していくのが大切ではないかと思います。

三日月知事

私は全国学力・学習状況調査は大事に思っていますが、されど学力テストということで見てきています。この調査は経年変化というのはあるのですか。経年で見ると、滋賀の場合は全国と比べて、勉強時間が減ってきているという傾向がずっとあるのでしょうか。

幼小中教育課長

この課題はずっとこの傾向で存在しております。改善できていない同じ状況でしております。

三日月知事

県内の地域別の傾向というのはあるのですか。比較的よくできてる地域とそうでないところというデータもあるのでしょうか。それが正答率に影響したり、しなかったりということもあるのでしょうか。

幼小中教育課長

ずっとできているところもあれば、地域別に見ると入れ替わりがあるところもありますが、その状況がなかなか改善されないというところは全体として依然あります。

三日月知事

経年でみる視点を持ちながら、地域や家庭での生活習慣をどのように改善していけるのかを考えることが必要だと感じます。

藤田委員 一定の学力は必要ですが、遊びもしつつ学力も上がるというのが理想だとは思います。

土井委員 大学でも学力を見るときに、筆記試験だけでは、なかなか測り切れない面があります。ゴムを例に申しますと、あるゴムの長さをはかるときに、ゴムがある長さに到達していることはわかるのですが、それが伸びきった状態での長さを計っているのか、伸びる前の長さを計っているのか、どちらなのかがわからないのです。藤田委員がおっしゃったように、勉強しかしてこなかった子の学力は、ゴムが伸びきった状態の長さなんです。他に色々なことやってきた子の学力は、ゴムが伸びる前の長さで、これからまだ伸びるということです。この部分は筆記試験だけではわからないのです。

藤田委員 私は、みんな平等に与えられた時間の大半を、ゲームやテレビに使うのはもったいないと感じます。

土井委員 私も気になりますのは、子ども達が受け身なところですよ。他にやりたいことがあって、それに一生懸命に取り組んでいるというならよいのですが、ただただゲームをやっているだけだとしますと、他に時間の使い方があるのではないかという気がします。試験勉強はしていなくとも、自分でやりたいことを計画立てて友達と協力しながら取り組んでいるなら、それはそれでいいんです。きっと生きる力にもつながるでしょう。ただ、面白くてゲームだけをやっている。気づいたら夜中になり、朝になり、残るのは眠さだけだったというのはどうかと思います。ゲームが好きで、自分でゲームを考えて、プログラミングにつながっていくなら、それはそれでよいのですが。そう考えると、何をさせないかよりは、何をさせるかということを考えることが大切なのではないかと思います。

平尾氏 同じ部活動に入っている子供でも、通学時間が長い子供もいれば短い子供もいます。部活動の時間や授業の時間は一緒ですが、ものすごく成績はいい（勉強・部活も含め）という子がいます。土井先生がお

っしゃるように、時間の使い方の中身の問題で、大人のワークライフバランスと一緒に、子供達もどう生きていくのか、どう学生生活を送るかということが重要なことだと思います。

青木教育長

まだまだご議論いただきたいところですが、ここでまとめとさせていただきます。まず、最初の方で出ておりましたのは、親が責任を持ってやるべき部分があるのではないかとということ。一方で親そのものの在り方というところをどうしていくのかというところが出ておりました。またさらには、今普及しているデジタルな部分を活用しながらコミュニケーションをとっていくということも必要ではないかという御意見がありました。後半の方では、子どもと一緒にデジタルなものの使い方を学ぶということ。単に使っているだけでは時間を潰しているだけなので、どういう風に使うかが必要で大切なことであるという御意見がありました。誰がそれをやるかという問題もありますが、ただ漫然と使うのではなく、どうつかっていくのかというところか提案していく必要があるということです。これを親がやるのか、はたまた学校がやるべきなのかというところは今後また議論していく必要があると思います。ここは非常に難しく、我々も実は社会、とくに家庭に対して、教育行政としてどのように関わっていくのかということは非常に難しい問題だと考えております。どこまで入れるのかということもあります。この辺り非常に悩みが深いところではありますが、いまご議論いただきましたように、もうほっとけないところに来ているのかなと思います。そんなことでいろんなご議論いただいた中で、PTAの方々ともお話をしながらどうしていくのか検討をして参りたいと思います。最後に、総括ということで知事から一言お願いします。

三日月知事

ありがとうございました。本日の午前中に県政経営会議があり、そこで京都大学の先生にご講演をいただきました。人生 100 年時代ということで、今年 2017 年に生まれた子どもたちは 107 歳まで生きるといようなお話がありました。そうすると今の学び方というのも変わっていくのではないかと。いやむしろ変えていかなくてはいけないのではないかと思います。また、引き続き委員の皆様とも議論を深めてまいりたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

青木教育長

ありがとうございました。これで本日の第4回滋賀県総合教育会議を閉会とさせていただきます。次回は2月6日の火曜日を予定しております。お疲れ様でした。